

# 障害児の祖父母についての研究

—同居の父方祖母に対する母親の意識を中心に—

今野和夫

## Grandparents of Children with Handicaps

— Mothers' Views on Paternal Grandmothers —

Kazuo KONNO

Grandparents often assume roles and functions that promote the health and development of their grandchildren with handicaps. But little formal attention has been paid to a significant component of the extended family: grandparents.

This study investigated the mothers' views on paternal grandmothers. Mothers of children with handicaps and mothers of normal children responded to a questionnaire.

The results suggested that mothers of children with handicaps had more negative views on their relationships with grandmothers and grandmothers' relationships with children than did mothers of normal children. The implications of these results were discussed in terms of formal support services for grandparents of children with handicaps.

要旨：祖父母は、障害のある子ども（孫）の健康と発達にとりいくつかの役割を果たし、また貢献していると考えられる。しかし、拡大家族の重要な成員である祖父母に対して、これまで組織的な研究はほとんどなされていない。

本研究は、子どもにとって父方の祖母に注目し、同居の父方祖母に対する母親の意識を明らかにしようとした。障害児をもつ母親たちと障害のない子どもをもつ母親たちに質問紙が配布され、回答が求められた。

その結果、祖母と自分の関係や、子どもと祖母の関係について、障害児をもつ母親たちは非障害児の母親たちよりも総じてネガティブな意識を持っていることが示唆された。研究結果は、障害児の祖父母に対する専門機関における支援の必要性やそのあり方とも関連させて、考察された。

### I はじめに

同居・別居のどちらでも、祖父母と障害児やその親とのかかわりが20年を越えることが決して珍しくない今日である。一方、我が国には、「おばあさん子は三文安い」ということわざがある。昇地(1968)<sup>1)</sup>は、これを引用しつつ、孫との関係が密になると特に障害児の場合は問題が生じやすいと指摘している。また溝上(1979)<sup>2)</sup>は、障害児の家族研究の中に祖父母(祖父母と障害児の関係や、祖父母と両親の関係)を位置づけることの必要性を指摘している。

ところで、これらの指摘がなされてから久しいが、我が国において、障害児の祖父母に着眼して得られた研究成果はきわめて少ない<sup>3)</sup>。すなわち例えば、子どもに障害がある場合の祖父母・子ども間や祖父母・親間関係ないし相互影響性とか、その関係が他の家族員に及ぼす

影響が明らかにされていない。また、子どもに障害があると知ったときの祖父母の心理やその変容過程とか、それらに影響する要因の究明もなされていない。さらにいくつかの著書では、障害児の祖父母とりわけ父親方の祖父母が、障害のある子どもが生まれた原因を母親側に押しつけるストレッサーとして言及されているが、この点に関するものを含めて、障害児の母親たちが祖父母に対してどのような意識を持っているのかを広く把握しようとの試みもなされていない。

一方、ノーマライゼーションや地域福祉の理念の普及とともに、福祉や教育等の専門機関における家族支援について、母親とともに父親、きょうだい、祖父母といった家族構成員や、その成員間の関係を含む、いわば家族全体を配慮した支援の必要性を指摘する声の広がりつつある<sup>4)</sup>。ちなみに国外には、専門機関における家族支援の一環として、祖父母たちへの出会いの場の提供とか、孫の障害や受けている教育に関する情報提供といった内

容で、祖父母への直接的な支援を試みている例を少数ながら認めることができる<sup>5)6)</sup>。その実施者たちは、心理面や情報面での祖父母への支援が、障害児とその家族に対する祖父母の支援力を高めると考えているが、この点についての客観的な評価は提示されていない。また、祖父母への支援を実施する際に生じやすい問題や、実施上の留意点についても、言及されていない。一方、我が国では、専門機関の行事や送迎に祖父母が伴う姿はよく見かけるが、祖父母への直接的な支援を計画・実施している機関はまだないものと思われる。

本研究では、母親にとって一般的には祖父よりも身近な存在と言える<sup>7)</sup>祖母について、障害児の母親がどのような意識を抱いているかを、子どもの障害についての認識や関心とか、祖母に対する専門的支援の必要性に関するものを含めて、多面的かつ包括的に捉えることを主たる目的とする。

なお今回の研究では、核家族の母親ではなく、状況からして母親や子どもとの接触が時間的にも頻度的にも多いであろう祖母、つまり父方祖母(母親の義母)と同居する母親の意識に、特に注目する。

また、得られた結果を手がかりとして、障害児を孫に持つ祖父母への専門的支援のあり方について言及したい。

## II 方法

### 1. 質問紙調査

子どもの障害名、子ども・母親・祖母(母親方と父親方)の年齢、家族数、家族形態、別居の祖母(母親方もしくは父親方)とのかかわり頻度、子どもの障害の祖母(母親方と父親方)への告知者、子どものことでの母親の気軽な相談相手、祖母から母親への支援内容等の事項への記入に加え、以下の領域に位置づけられる47の文章(表2参照)について、共感する場合(現在の気持ちや考えと同様)に母親に○印を付けてもらった。すなわち、

- ・祖母と子どもの関係。
- ・祖母と自分(母親)の関係。
- ・祖母の相談相手の存在・必要性。
- ・障害に関する祖母の認識・関心。

さらに、祖母との大きなトラブル(その有無や原因、祖母・母親関係への影響)に関する質問と、自分の祖母や障害児を孫に持つ一般の祖父母に対する専門的支援の必要性に関する質問が、補足的に設けられた。

なお本研究では、非障害児の母親からも、直接該当しない文章(表2参照)以外の文章に対する共感の有無が得られた。

## 2. 対象者(母親)

### 1) 障害児の母(障害児母群30名)

職員を通して、秋田県内の通園施設(2園)に子どもとともに通っている母親に調査への協力が求められ、101名(92%)から回答が寄せられた。その中で父方祖母が同居する母親は30名(29.7%)であり、うち16名には祖父も同居。なお別居の母方祖母(1名については既に死亡)とのかかわり頻度は多い順に、月1, 2回が12名(41.4%)、週1回くらい6名(24.1%)、年3, 4回くらい5名(17.2%)などとなっている。

母親の平均年齢は35.0歳(25歳から48歳)、子どもは60.43か月(2歳7か月から7歳3か月)、父方祖母は65.7歳(50歳から77歳)、母方祖母は62.8歳(49歳から77歳)である。子どもの障害は精神発達遅滞が半数ほどで、その他は自閉症、聴覚障害、言語障害、言葉の遅れなどである。

なお、子どもの障害について祖母に告知するという役割は母親に偏っており、特に別居の母方祖母(実母)に対しては、「父親は同席せず母親が一人で」(21名, 72.4%)と「父親も同席して母親が」(5名, 17.2%)で9割を占めている。一方父方祖母に対しては、「父親は同席せず母親が一人で」(33.3%, 10名)と「父親が同席して母親が」(16.7%, 5名)を合わせると5割であり、他には「母親は同席せず父親が一人で」が4名(13.3%)、「母親も同席して父親が」が8名(26.7%)となっている。知らせていない人も3名いる。

さらに、障害児母群の場合、相談相手がいないとする1名を除く29名中、子どものことで気軽に相談できる人として多く挙げられているのは(複数選択可)、夫(20名:69.0%)と通園施設等専門機関の職員(19名:65.5%)であり、ついで障害児をもつ友人(11名:37.9%)、母方祖母(9名:31.0%)、母親のきょうだい(同)、父方祖母(7名:24.1%)、障害のない子どもがいる友人(同)などである。夫とともに通園施設等専門機関の職員が、母親の重要な相談相手になっている。

### 2) 非障害児の母(非障害児母群23名)

秋田市市内の一幼稚園の非障害児を持つ母親205名(回収率73%)であり、その中で父方祖母同居の母親は23名(11.2%)—障害児母群よりも比率的にかなり少ない—。別居の母方祖母がいるのは22名。母方祖母とのかかわり頻度は多い順に、月1, 2回が8名(36.4%)、年3, 4回くらい6名(27.3%)、週1回くらい3名(13.6%)、年に1回くらい(同)等である。母親の平均年齢は35.6歳(29歳から43歳)、子どもは65.1か月(3歳8か月から6歳8か月)、父方祖母は64.2歳(53歳から72歳)、母

方祖母は63.9歳（56歳から79歳）である。

### 3) 祖母から母親への支援内容

祖母（以下、特別の言及がない限り、母方祖母を指す）が母親にいつもしてくれていることを問うたところ（複数選択可）、表1に見るように、両群とも「代わりに子どもを見てくれる」といった育児の代替者の機能が70%を越える高い選択率であった。以下、障害児母群では「役立つ情報や知識を伝えてくれる（36.7%）」、「代わりに買い物（30.0%）」等であり、非障害児母群では「代わりに買い物（43.5%）」、「相談相手になってくれる（34.8%）」、「代わりに、教育機関へ送迎（34.8%）」等である。

表1 祖母から母親への支援 単位 % (人数)

	障害児母群	非障害児母群
代わりに子どもを見てくれる	70.0 (21)	73.9 (17)
役立つ情報や知識をあなたに伝える	36.7 (11)	26.1 (6)
代わりに買い物	30.0 (9)	43.5 (10)
あなたを励ます	20.0 (6)	4.3 (1)
子どもへの接し方について助言する	20.0 (6)	8.7 (2)
あなたに経済的援助	20.0 (6)	13.0 (3)
代わりに、教育機関へ送迎	20.0 (6)	34.8 (8)
あなたの相談相手	16.7 (5)	34.8 (8)
代わりに、病院に連れていく	10.0 (3)	13.0 (3)
その他	0	8.7 (2)

(注) 障害児母群30名、非障害児母群23名

## III 結果

以下の1から4については、表2を参照していただきたい。

### 1. 祖母・子ども関係

#### (1) 子どもに対する祖母の思いについて

「祖母は子どもがかわいいと思っている」と「子どもを家族の大切な一員だと思っている」に対して、障害児母群では、非障害児母群と同様、60%を越える比較的高い共感率が示されている。

障害児母群における「その子なりのペースで育てばよいと思っている」(43.3%)、「祖母は子どものためにいつまでも元気でいたいと思っている」(36.7%)、「子どもに感謝している」(13.3%)、「子どもを人に自慢したく思っている」(10.0%)への共感率は、非障害児母群とさほど変わらない。

一方、障害児母群における「祖母が子どもの将来を心

配している」に対する共感率は43.3%、「子どもがかわいそうと思っている」に対するそれは33.3%と、いずれについても5割に満たない共感率であるが、非障害児母群では前者に対して8.7%ときわめて少なく( $\chi^2 = 6.09$ ,  $df = 1$ ,  $p < 0.025$ )、後者にいたっては誰も共感を示していない( $\chi^2 = 7.40$ ,  $df = 1$ ,  $p < 0.01$ )。これら二つの意識は、障害児の母親にとりわけ顕著なものといえよう。

なお、「祖母は子どもが同じ年齢の子どもにはやく追いついてほしいと思っている」という障害児母群にのみ設定されている文には、その4割が共感を示している。

#### (2) 子どもに対する祖母のかかわりについて

「祖母は子どもの小さな進歩も喜んでくれる」に対する共感率は両群で5割を越えているが、障害児母群の方でやや高い数値(66.7%)が得られている。

この文や「小さな進歩でも見逃さない」といったポジティブな内容の文とともに、「同じ年齢の子どもと比べる」、「子どもに甘すぎる」、「子どもにかますぎる」といったネガティブな内容の文に対して、両群はさほど差のない共感率を示している。なお、ネガティブな内容の諸文を見ると、その多くの文で障害児母群の共感率が高めにでている。

#### (3) 子どもに対する祖母の影響について

「子どもの発達にとり祖母は大切な存在である」と「子どもの心を豊かにしてくれる」に対して、障害児母群ではいずれも20%台の共感率であるが、これらに対する非障害児母群の共感率は障害児母群のものを明らかに上回っている。とりわけ前文に対する共感率は52.2%であり、障害児母群のほぼ2倍となっている。

#### (4) 祖母に対する子どもの思いについて

「子どもは祖母が好きである」に対して、どちらの群でも6割ほどの高い共感率が得られている。

一方「子どもは祖母を頼っている」への共感率は、両群とも2割台である。

#### (5) 祖母に対する子どもの影響について

50%を超える共感率が得られている文は両群とも見当たらない。

祖母に対する身体的な負担を認める母は障害児母群(16.7%)よりも非障害児母群(26.1%)の方で、精神的な負担を認める母は非障害児母群(13.0%)よりも逆に障害児母群(23.3%)の方で、それぞれ多くなっている。

一方、「祖母も子どもから学ぶことがある」には両群とも同程度の比較的低い共感率(10%台)が示されているものの、その他のポジティブな文すなわち「子どものおかげで祖母はよい祖父母期を過ごしている」(障害児母群23.3%, 非障害児母群39.1%)、「祖母も子どもから元気づけられている」(障害児母群20.0%, 非障害児母群30.4%)、「子どもがいることは祖母と祖父の関係によ

表2 祖母に対する母親の意識

単位 % (人数)

	障害児母群(30)	非障害児母群(23)
<b>(A) 祖母・子ども関係について</b>		
a. 子どもに対する祖母の思いについて		
・祖母は子どもを家族の大切な一員であると思っている。	66.7 (20)	73.9 (17)
・祖母は子どもがかawaiiと思っている。	63.3 (19)	65.2 (15)
・祖母は子どもがその子なりのペースで育っていけばよいと思っている。	43.3 (13)	30.4 (7)
・祖母は子どもの将来を心配している。	43.3 (13)	8.7 (2)
・祖母は子どもの役に立ちたいと思っている。	40.0 (12)	39.1 (9)
・祖母は子どものためにいつまでも元気でいたいと思っている。	36.7 (11)	34.8 (8)
・祖母は子どもがかawaiiそうと思っている。	33.3 (10)	0
・祖母は子どもを社会の大切な一員であると思っている。	16.7 (5)	26.1 (6)
・祖母は子どもに感謝している。	13.3 (4)	8.7 (2)
・祖母は子どもを人に自慢したく思っている。	10.0 (3)	17.4 (4)
・祖母は子どもに大きすぎる期待を抱いている。	3.3 (1)	8.7 (2)
・祖母は子どもが同じ年齢の子どもにはやく追いついてほしいと思っ ている。(障害児母群のみ)	40.0 (12)	
b. 子どもに対する祖母のかかわりについて		
・祖母は子どもの小さな進歩も喜んでくれる。	66.7 (20)	52.2 (12)
・祖母は子どもを同じ年齢の子どもと比べる。	36.7 (11)	43.5 (10)
・祖母は子どもに甘すぎる。	30.0 (9)	26.1 (6)
・祖母は子どもの小さな進歩でも見逃さない。	23.3 (7)	26.1 (6)
・祖母は子どもをかますぎる。	20.0 (6)	13.0 (3)
・祖母は子どもを無視している。	16.7 (5)	8.7 (2)
・祖母は子どもにきびしすぎる。	16.7 (5)	8.7 (2)
・祖母は子どもにどうかかわればよいかとまどっている。	10.0 (3)	8.7 (2)
・祖母は子どもを人目にふれさせたがらない。	3.3 (1)	0
c. 子どもに対する祖母の影響について		
・子どもの発達にとり祖母は大切な存在である。	26.7 (8)	52.2 (12)
・祖母は子どもの心を豊かにしてくれる。	23.3 (7)	30.4 (7)
d. 祖母に対する子どもの思いについて		
・子どもは祖母が好きである。	63.3 (19)	60.9 (14)
・子どもは祖母を頼っている。	20.0 (6)	26.1 (6)
e. 祖母に対する子どもの影響について		
・子どものおかげで祖母はよい祖父母期を過ごしている。	23.3 (7)	39.1 (9)
・子どものことで、祖母には精神的な負担がかかっている。	23.3 (7)	13.0 (3)
・祖母は子どもから元気づけられている。	20.0 (6)	30.4 (7)
・祖母も子どもから学ぶことがある。	16.7 (5)	17.4 (4)
・子どものことで、祖母には身体的な負担がかかっている。	16.7 (5)	26.1 (6)
・子どもがいることは、祖母と祖父の関係により影響を及ぼしている。	10.3 (3)	34.8 (8)
・子どものことで、祖母には経済的な負担がかかっている。	10.0 (3)	8.7 (2)
・子どものことで、祖母は自身の生活を犠牲にしている。	3.3 (1)	8.7 (2)
・子どもがいることで、障害児・者に対する祖母の関心が高まってきて いる。(障害児母群のみ)	13.3 (4)	
<b>(B) 祖母・母親関係について</b>		
a. 私と祖母の連帯性について		
・祖母の子どもへの接し方に私は大きな不満がある。	33.3 (10)	17.4 (4)
・私と祖母は子どものことでよく衝突する。	30.0 (9)	8.7 (2)
・私と祖母の心の絆は、子どもが生まれたことでむしろ強まっている。	13.3 (4)	26.1 (6)
・祖母は私と子どものことで考えが合う。	10.0 (3)	4.3 (1)
b. 私に対する祖母の影響について		
・私は子どものことで祖母から助けられている。	50.0 (15)	60.9 (14)
・私は子どものことで祖母から学ぶことが多い。	16.7 (5)	34.8 (8)
・私は子どものことで祖母から励まされている。	16.7 (5)	21.7 (5)
<b>(C) 子どものことでの祖母の相談相手・話し相手</b>		
・祖母にも、子どものことで気軽に話し合える人がいればよいと思う。	23.3 (7)	4.3 (1)
・祖母には、子どものことで気軽に相談できる人がいない。	16.7 (5)	8.7 (2)
<b>(D) 障害についての祖母の認識や関心について (障害児母群のみ)</b>		
・祖母は子どもに遅れや障害があることを認めたがらない。	16.7 (5)	
・祖母は子どもの遅れや障害の原因が私にあると思っている。	16.7 (5)	
・祖母は子どもの遅れや障害のことをあまり知らない。	13.3 (4)	
・祖母は子どもの遅れや障害のことをくわしく知りたいと思っている。	6.7 (2)	

い影響を及ぼしている」(障害児母群10.0%, 非障害児母群34.8%,  $x^2 = 3.47$ ,  $df = 1$ ,  $p < 0.10$ ) に対する障害児母群の共感率は、総じて非障害児母群のものよりも低くなっている。

なお、障害児母群のみに設定されている質問(「子どもがいることで、障害児・者に対する祖母の関心が高まってきている」)に対しては、13%ほどの共感率となっている。

## 2. 祖母・母親関係

### (1) 私と祖母の連帯性について

「祖母の子どもへの接し方に私は大きな不満がある」、「子どものことでよく衝突する」に対して障害児母群の30%ほどが共感している。この率は、非障害児母群よりもかなり大きなものである。

「(両者の)心の絆は子どもが生まれたことでむしろ強まっている」に対する障害児母群の共感率(13.3%)は、非障害児母群(26.1%)のその半分程度にすぎない。

### (2) 私に対する祖母の影響について

「子どものことで祖母から助けられている」に対しては、障害児母群の半数、非障害児母群の6割ほどが共感している。

この文、そして「祖母から学ぶことが多い」と「祖母から励まされている」に対する障害児母群の共感率(ともに16.7%)は、非障害児母群のものを下回っている。

## 3. 子どものことでの祖母の相談相手・話し相手

祖母の気軽な相談相手の不在(16.7%)や、祖母の気軽な話し相手の必要性(23.3%)を認める障害児母群の率は、数値的には大きいと言えないが、非障害児母群のものをかなり上回っている。

## 4. 障害についての祖母の認識や関心(障害児母群のみ)

「祖母は子どもに遅れや障害があることを認めたがらない」と「遅れや障害の原因が私にあると思っている」には16.7%、「子どもの遅れや障害のことをあまり知らない」には13.3%の共感率が得られている。

「子どもの遅れや障害のことを詳しく知りたいと思っている」への共感率は、6.7%と低い数値になっている。

## 5. 祖母と母親のトラブル及び両者関係へのその影響

### (1) トラブル

これまで子どものことで祖母と何か大きなトラブル

(衝突)があったかどうかを問うたところ、両群とも半数ほどがトラブルがあったと答えている。

内訳を見ると、障害児母群では「たくさんあった」が13.3%(4名)、「たくさんではないが、あった」が43.3%(13名)、非障害児母群では「たくさんあった」が8.7%(2名)、「たくさんではないが、あった」が39.1%(9名)である。

ちなみに質問紙ではその原因についての記載も要望しているが、障害児母群では以下のようなものが挙げられている。

- a. 障害をもっている子どもが家にいるということを認めたくない。腹立たしいという気持ちをストレートに話題にしていたから、よく衝突しました。
- b. 手足が不自由でもないのに言葉が遅いというだけで今の機関にお世話になることが義母には気に入らない。
- c. 普通小学校にと思うが、養護学校へと言う。
- d. ことばの発音が不明瞭でそれをきつく言い直させたり「ちがう」と言ったりしないようにと、専門家から指導を受けたので、それを何度となく家族にも話して協力してもらおうとしたが、義母だけは子どもにきつく言い直させたり、冷たい態度をとったり「自分は自分のやり方でやる」と言って聞き入れなかったの、私の怒りが頂点に達し口げんかとなった。
- e. 孫がかわいいのはわかるが、甘いので教育上トラブルがあった。
- f. 子どもの育児の考え方。
- g. しつけについてできないと怒る(少しずつ時間をかけてやらせたい)。
- h. 朝から泣かせてはいけないとか、よその子どもとの関わりのことで、よその子を非難する。
- i. 子どもの性格を理解していない。子どもがいやがるまで口うるさく言う。
- j. 摂食・しつけ面での考え方の相違。

トラブルの原因には、一般の親が祖父母の孫への関わり方に対して抱く不満、すなわち過保護や過干渉といった態度の他に、aからdのように、障害のある子どもの拒否や、子どもに対して行われている教育の無理解等、子どもに障害があることとの関連を否定できないものがある。

### (2) トラブルの影響

質問紙では、トラブルがあった(「たくさん」および「たくさんではないが、あった」)と答えた母親(障害児母群17名。非障害児母群11名)へ、「トラブルは、後で振り返ってみて、あなたと祖母との関係におおむねどの

ような影響を及ぼしているか」とさらに問われた。

その結果、両群に大きな違いが認められた。すなわち障害児母群では、「どちらかという、よくない影響」が35.3%（6名）、「よくない影響」が11.8%（2名）、「どちらかという、よい影響」が7.1%（1名）、「どちらともいえない」が29.4%（5名）、等であった。非障害児母群（11名）では、「よい影響」が1名、「どちらかという、よい影響」が5名、「どちらともいえない」が4名、「どちらかという、よくない影響」1名であった。

祖母との大きなトラブルがその後の母親・祖母関係に好ましくない方向での影響を及ぼすと考える障害児母群の率（約半数）は、非障害児母群のそれ（9%、1名）を大きく上回っている。

## 6. 祖父母への専門的支援に対する母親の意識

### (1) 自分の祖母に対する専門的支援について

方法で記述したように、質問紙には、祖母（父方祖母）が子どもの障害を知って間もない頃、及び現在における祖母への専門的支援の必要性に関する質問も設定されている。

#### 1) 祖母が子どもの障害を知って間もない頃

「今振り返ってみて、子どもさんに障害があるとわかったばかりの頃に、専門家からの助言や励ましがあなたの祖母にもあればよかったですか」との問いに、3割ほど（33.3%、10名）が「はい」と答えている。一方、同様に3割ほど（30%、9名）が「いいえ」と答えている。他は、「どちらともいえない」ないし無回答である。

ちなみに以下のように、子どもの障害についての祖母による理解や受容の困難、母親に対する祖母の不信感への懸念など、祖母への専門的支援を認める理由として様々なものが記されている。

- はっきり自分たちから言うのはつらいので。
- 義母は子どもの成長にあせりを感じていた。私が説明しても認めようとしなかった。
- 教育熱心なところがあるために少々言葉が遅いということで、まちがった知識で他の子と比べてたりして、人を責めてばかりいるので、きちんとしたことを私の口からではなく専門の人に伝えてほしかった。
- 普段から嫁の言っていることはそのまま信じられないと思っているので、どんなに専門家から聞いてきたことを話してもわかろうとしないので。
- 私は仕事をしており面倒を見てもらっていたので、どうしたらいいか助言があればよかったです。
- 話しても理解力が乏しいが、接し方について詳しく話して下さる方がいればよかったです。

一方、「いいえ」については、以下のような理由が挙げられている。

- すぐ理解してくれたので。
- 年老いて体も弱く、深く子どもにかかわるのは無理だから。
- 納得できないだろうから。

### 2) 現在

「子どもさんのことで、医療や教育の専門家の立場から祖母に伝えてほしい、教えてほしいと思うことをお持ちですか」との問いに対して、祖母が子どもの障害を知って間もない頃をかなり上回る半数（56.7%、17名）ほどの母親が「いいえ」と答えている。ただし、「はい」と答えている母親は、障害があると知って間もない頃とさほど変わらぬ比率（26.7%、8名）で存している。

なお、この問いへの肯定者には、祖母への支援として母親が専門家に求める内容の記載が求められており、以下のようなものが挙げられている。

- 社会がどのように子ども達を受け入れてくれるか、地域単位の具体的な方法やその環境を知らせてほしい。また、その内容は明るく希望の持てるものであってほしいと思います。
- 子どもが今受けている教育の内容。
- 「当たり前」なんていうことは世の中に一つもないということ。「普通」なんてことは誰も定義できないということ。
- 子どもとの接し方や今後の子どもの見通し。
- 子どもがよろこんで遊んだり勉強していることをなぜよろこんでいるか。どんな勉強をしているか。

### (2) 一般の祖父母に対する専門的支援について

質問紙には以下の3つの質問が用意された。

- ①障害のある子ども（孫）をもつ祖父母たちが集い、孫のことで話し合える機会が多くあればいいと思いますか。
- ②あなたは、病院や通園施設、学校などの専門機関が、祖父母への支援（情報の提供や悩み事の相談など）をもっと考えてほしいと思いますか。
- ③外国には、障害のある子どもを持つ祖父母たちのために学習や親睦・交流の機会を提供している機関がいくつかあります（例えばワシントン大学）。日本でも例えば療育センターや通園施設、養護学校のようなところでそのような機会を作ってくればよいと思いますか。

設定された3つの質問に対して無答も多く認められたが（三割から四割）、①の孫をもつ祖父母たちが集い、話し合える機会については「あればいい」と23.3%（7名）の母親が答え、「別になくてもいい」と33.3%（10

名)の母親が答えている。ちなみに「あればいい」と思う理由の記述には、以下のように、子どもやその障害についての祖父母の理解とか、心配やとまどいといった祖父母の心理的負担の軽減・解消とかに対する期待が込められている。「なくてもいい」と思う理由の記載はなかった。

- a. 頭の柔らかいうちに障害というものを変な目で見ることがなくなるように、いろんな障害の子どもが集まるところで祖父母が遊びながら学べるように。
- b. 祖父母に障害児をもっとよく知ってほしいから。
- c. 祖父母達も心配しているし、一緒に考えていけたらいいと思うのです。
- d. 祖父母達も孫のことで深く考え込んでふさぎ込んでしまうことがあるでしょうから、誰かと話し合う、しゃべるだけでも心が晴れることもあると思うので。
- e. 遅れなどの孫をもつ祖父母もどう接していいのかとまどいもあると思うので、話す機会があればいいと思います。

なお、②に対しては、「そうは思わない」(36.7%、11名)より若干少ないものの、30%を越える母親(10名)が「はい」と答えた。

一方、外国ですでに専門機関において祖父母への支援が実際に行われていることの紹介を含む質問③に対しては、「はい。是非作ってほしい」(16.7%、5名)と「はい。できれば作ってほしい」(46.7%、14名)を合わせると6割を越える母親が肯定的な見解を示している。「作らなくていい」とする母親は、36.7%(11名)である。

#### IV 考察

障害児母群は非障害児母群と同様にその6割以上が、祖母は子どもを家族の大切な一員だと思っていることを認め、また祖母から子どもへの愛情(子どもは祖母が好きである。祖母は子どもの小さな進歩も喜んでくれる)や子どもから祖母への好意(子どもは祖母が好きである)も認めていた。

一方障害児母群では、5割に満たないものの、祖母は子どもの将来を心配している、子どもがかわいそうと思っていると考える母親の率が、非障害児母群より極端に高くなっていた。心配や同情には、祖母が障害児者の医療や教育、福祉等の現状についての情報を欠いていることや、障害のある子どもの可能性についての偏見や誤解を解けないでいることも関係していると思われる。そして、そのような心配や不安が大きい場合、それはとりわけ障害の理解や受容ができなかつたりして自分らしさを回復できずにいる母親の精神面に、大きな負荷を与えると思われる。

また、障害児母群は、甘すぎる、かまひすぎる、厳しすぎるなどと子どもに対する祖母の関わりにネガティブな意識をもつ母親の率が非障害児母群よりも高かった。さらに、子どもに対する祖母の影響(例えば、子どもの発達にとり大切な存在である)、祖母に対する子どもの影響(例えば、子どものおかげで祖母はよい祖父母期を過ごしている。子どもがいることは祖母・祖父関係による影響を及ぼしている)、母親に対する祖母の影響(例えば、祖母から学ぶことが多い)についてポジティブな意識を抱く母親の率が、総じて非障害児母群よりも低くなっていた。

かつ、母親と祖母の連帯性に関連して、祖母とよく衝突するとか、子どもへの祖母の接し方に不満があるとする母親の率は、いずれも30%ほどの率とは言え、非障害児母群を極端に上回っていた。ちなみに、本研究では共感を問う質問の他に、子どものことでの母親・祖母間の大きなトラブルに関する質問が設定されていた。その中でトラブルがその後の両者の関係に好ましくない方向での影響を及ぼしていると答えた母親は、障害児母群では半数ほどいたが、非障害児母群では一人に過ぎなかった。

小野・玉井(1992)<sup>9)</sup>は、母親は母親方よりも父親方の祖父母との間の方で若干トラブルが多いことを見だし、トラブルを含めた関わり合いにより母親と祖父母の新たなよき関係が創造されることもあり得ると、示唆している。些細な衝突が生じることは、日常生活においてむしろ当然のこと、自然なことと言えよう。しかし些細な衝突や大きなトラブルが頻繁に生じることは、母親の心身両面のみならず子どもの心理や発達にも大きな影響を及ぼすであろう。大きなトラブルがあったとして、それが祖母・母親のその後のよき関係や相互理解に結びついていくためにはどのような要因(例えば、父親の介在の仕方。専門家からの適切な助言)が欠かせないのかについて、事例的研究法も用いながら詳細に検討することは、通園施設等の専門機関における家族支援の充実にとって欠かせないであろう。

長い年月の中で多くの経験を経、たとえたくさん苦勞をしてきても、多くの祖母は、障害のある、もしくは障害児と呼ばれる孫を持つまで、障害児者とかかわる機会は決して多くなかったであろう。そして、障害児のいる家族に対して「暗い」とか「不幸」といったイメージを抱く一方、障害児に対しては、その医療や教育、福祉等の現状や向上を知らないだけでなく、生命力や発達可能性の大きさについても否定的・消極的な考え(例えば、長生きできない)を抱きがちであると思われる。すなわち、経験上も、知識上も、また障害児及びその家族観と言った点から見ても、母親と同様、あるいはそれ以上に乏しい状況のままに障害のある子どもの祖母となる人が

多いであろう。加えて、伝統的な家父長制的な家意識をもっていたり、自分の子どもたちを無事育て上げたことに対して親としての自信や誇りを抱いている人もいるであろう。一方、孫に障害があると知ってから、知識を増やすことや偏見をただすきっかけを得ることは、母親以上にむずかしいと思われる。

子どもに対する祖母の愛情を認めつつも、祖母・子ども関係、祖母・母親関係に対する障害児の母親たちの見方が非障害児の母親たちよりも厳しいものとなっている点についての分析は決して容易でないが、以上のような祖母の側の状況も少なからず反映していよう。ちなみに、Mirfin-Veitch et al. (1997)<sup>8)</sup>は、相互支援関係にある祖母・母親ペア(「involved」)と、祖母が母親に支援をしていない祖母・母親ペア(「less involved」)に面接している。そして、子どもに障害があることが母親と祖母の関係に悪影響を及ぼすと考えるのは短絡的であり、子どもが生まれてからの両者の関係には、子どもが生まれる前からの両者の関係のありようが大きく影響するのではないかと示唆している。

#### ： 祖父母への専門機関における支援について

さて本研究の結果より、障害児母群には子どものことで祖母が気軽に話し合える人がいればよいと思う母親や、自分の祖母や障害のある孫のいる祖父母一般に対する専門的支援の必要性を感じている母親が少なからずいることが明らかにされた。

心理面での祖父母の不適応な状態とか、子どもの障害や教育などに対する祖父母の理解のなさを日頃感じている母親は、決して少なくないと思われる。一方、そのことで母親の方が専門機関に相談しようとすることはありえても、祖父母に対する専門機関からの直接的な支援の必要性まで感じることは日頃あまりないであろう。というよりも、子どもが生まれたり障害を告知されてからかわりを持ってきている医療や教育等の種々の専門機関では、おそらく祖父母への直接的な支援(カウンセリングを含む)を実施していないであろうし、母親は、子育て上の過大な責任と負担を当然のように担ってきているであろう。そのような状況で専門機関による祖母への直接的な支援の必要性をこの調査で問われて、おそらくとまどいの方が先に立ったのではないだろうか。一方そうであるにしても、直接的な支援の必要性に関する、海外の実践の簡単な紹介を含むより具体的な質問に対して、60%を越える母親が是非あるいはできればそのような機会を作ってほしいと回答しているのは注目に値する。祖父母に関して障害児の母親が日頃抱えている悩みや問題の深さが示唆される。金田と今野(1997)<sup>9)</sup>は、ある難聴幼児通園施設を事例として、世間の目を気にして祖母が子どもへの補聴器の装用をかたくなに認めなかったり、

家庭での装用に非協力であったりして家族が不和状態に陥ってしまうケースがあると、報告している。

数は少ないものの、欧米ではすでに祖父母への支援が単発ないし連続的に試みられている。今後は我が国の医療、教育等の専門機関においても、父方祖母を含む祖父母に対する支援が試みられる必要があるだろう。また祖父母を含む家族全体への支援のあり方が、追究される必要があるだろう。

一方、専門的な支援としては大きく二種類考えられる。一つは祖父母を直接対象とするものであり、もう一つは母親や父親を対象(ないし経由)とする間接的なものである。

例えばそれが通園施設でなされる場合、前者(直接的支援)の内容としては、祖父母たちの交流と励まし合い、障害を持つ子どもの教育・福祉・社会生活・発達可能性の大きさ等についての学習、子どもに対する祖父母の役割や意義の大きさと陥りやすい問題点(過保護・過干渉とか、障害の受容の難しさなど)の学習、子どもが受けている教育や指導の紹介・説明、子どもとの楽しい交流の中で子どもの発達にも寄与できる手遊びや手作りおもちゃの学習・実践、個別の相談へのカウンセリング的対応、等が考えられる。ちなみに、年に1回程度というように単発的にそれがなされるにせよ、幾度か定期的かつ連続的になされるにしても、同種の障害をもつ他児との比較などにより、支援の機会が予想に反して祖父母の心労を増大させてしまうことのないよう、配慮もしくは留意する必要がある。

次に祖父母への間接的な支援としては、例えば親を対象になされる園内学習会のテーマとして祖父母に関するものを取り上げ、子どもの人間形成や発達に対する祖母の役割(本研究の結果では、非障害児母群でも必ずしも高く評価されていない)、障害の理解や受容とか心理的適応が時に親よりも祖父母の方で一層困難となる理由等について、職員が親とともに話し合うことがある。

## V おわりに

本研究では、障害児の祖母(同居する父方祖母)に対する母親の意識を、祖母・子ども関係、祖母・母親関係、子どものことでの祖母の相談相手・話し相手、障害についての祖母の認識・関心といった四つの側面から、非障害児の母親についての結果をも参照しつつ捉えようとした。祖母・母親関係については、大きなトラブルの生起や原因、その後の祖母・母親関係に対する影響に関連した検討を加えるとともに、自分の祖母や障害児の祖父母一般に対する専門的支援についての母親の考えも明らかにしようとした。また、専門的支援を実際にどのように



して行えばよいのかや、どのような点に配慮すべきかについても若干の言及がなされた。

本研究ではサンプル数が少なく、今後は本研究で得られた結果についてより多くのサンプルを用いて検証していく必要がある。また祖母に対する障害児母群と非障害児母群の意識には、同居の父方祖母のみならず別居の母方祖母（実母）についても違いがあるか検討する必要がある。もちろん、祖母が同居しないいわゆる核家族についても、父方や母方の祖母や祖父に対して母親がどのような意識をもちどのような関係をもっているかも、明らかにする必要がある。さらに、冒頭ですでに指摘したように、障害児を孫にもつ祖父や祖母の心理とかその変化に影響する要因の究明も課題として残されている。

## 文 献

- (1) 昇地三郎 (1968) 肢体不自由児と家庭. 療育 (9), pp. 10-14.
- (2) 溝上 脩 (1979) 障害児の家族研究—その研究課題と方法論の検討—. 佐賀大学教育学部研究紀要, 第26集, pp. 101-116.
- (3) 小野恵子・玉井真理子 (1992) 障害乳幼児をもつ母親が家族内の人間関係において経験するストレス (3)—祖父母との
- 関係を中心に—. 日本特殊教育学会第30回大会発表論文集, pp. 808-809.
- (4) 中野敏子・田澤あけみ他 (1995) 利用者主体の家族援助. 大揚社.
- (5) Meyer, D. J., & Vadasy, P. F. (1986) Grandparent workshops : How to organize workshops for grandparents of children with handicaps. Seattle : University of Washington Press.
- (6) George, J. D. (1988) Therapeutic intervention for grandparents and extended family of children with developmental delays. *Mental Retardation*, 26, (6), 369-375.
- (7) 杉井潤子・泊 祐子他 (1994) 祖父母・孫関係に関する研究—第3報—. 大阪市立大学生活科学部紀要, 第42巻, pp. 141-153.
- (8) Brigit Mirfin-Veitch, Anne Bray, & Marilyn Watson (1997) "We're Just That Sort of Family" Intergenerational Relationships in Families Including Children With Disabilities. *Family Relations*, 46, 305-311.
- (9) 金田昭三・今野和夫 (1997) 障害児の祖父母についての研究—通園施設における祖父母への支援—. 日本特殊教育学会第35回大会発表論文集, pp. 686-687.